雨の日に

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨の日に

【Ｎコード】
Ｎ６５２８Ｐ

【作者名】
葉月

【あらすじ】
雨の日に傘を忘れた主人公。

大雨を前にして呆然としていると、

学年１もてる、堂島くんが話しかけてきて・・・

一定のリズムを刻む雨音。
じめじめとした雨の日特有の湿気。
私、高田唯は、学校の下駄箱に呆然と立っていた。
「今日に限って・・・」
いつもは、かばんの中におりたたみ傘をいれている。
でも、今日は朝寝坊して入れるのを忘れていた。
しかも、委員会で遅くなり、友達はおろか、下駄箱には誰もいない・・・
こうなったら仕方ない・・・。家まで傘ささずにダッシュでかえるか・・・
腹をくくり、1歩を踏み出そうとした。
「ねぇ」
ふと後ろから声がする。
私は後ろを見た。
そこにいたのは、同じクラスの堂島駿くん。
「傘持ってないの？」
私に微笑みながら聞いてくる。
「うん。ちょっと忘れちゃって」
あははって笑って恥ずかしさをごまかす。
「じゃあ、傘入っていく？」
予想もしてなかった言葉が彼の口からでて、驚く。
「えっ、でもいいの？」
私が心配そうにきくと、全然大丈夫と言ってくれた。
私は雨に濡れなくてすむので、遠慮なく入れてもらった。

雨だから、子ども達も外であそんでいない。
この住宅街の道に響くのは、雨音と、パシャパシャという二人分の

足音だけ。
沈黙が続く。
別に特別親しいわけでもないので、何を話せばいいのか分からない。
堂島くんはすごくもてるし。
全然しゃべったりしないしなんで今傘を貸してくれてるのかも分からない。
ふと、横を見上げる。
高い鼻、大きくてきりっとした目、薄い唇、すっとしたあご。
女の子たちが騒ぐのも分かるような気がする。
肩をみると、彼の左肩は濡れている。
私が濡れないように私のほうに傘を多くさしてくれる。
そんな小さな気遣いに、私の鼓動が速くなるのが自分でも分かった。

私の家が見えると、
「あっ。ここ私の家。ありがとう。こんなとこまで傘貸してくれて」
と私はお礼を言い、じゃあねと傘をでようとした。
”がしっ”
私は腕をつかまれた。
「？」
私が振り向くと、堂島くんがまっすぐとした目で私を見ていた。
「俺、高田のこと好きだ。」
そういって、私を抱きしめた。
ぱさっ”
彼の持っていた、黄色い傘がゆっくりと道路に落ちていった。
私の顔が急に真っ赤になっていくのが自分でも分かった。
３０秒くらいの、短い間。
でも、私にはとても長く感じた。
「そういうことだから」
彼も顔を赤くさせて、走って帰っていった。

まだ、私のからだには彼のぬくもりが残っているようだった。

（後書き）

はい。すいません。
とてもぐだぐだに・・・

日本語が変だとか、そういうつっこみはなしでお願いいたします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6528p/

雨の日に

2011年1月13日05時54分発行